

木曽川

木曽川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を皆様とともに考えていきたいと思っています。
今回は川と緑と古城の街・愛知県犬山市を特集。
愛知県最北部に位置する犬山の現状、
現在進行形の事業をクローズアップします。
また宝暦治水第三編では、その功労者たちをご紹介します。



INDEX

ふるさとの街・探訪記

■大河に浮かぶ歴史のドラマ・犬山市

AREA REPORT

■広大で肥沃な濃尾平野の大動脈・濃尾用水事業

気ままにJOURNEY

■美しき木曽の流れと、咲き競う桜花。
犬山は、今、爛漫の春。

歴史ドキュメント(宝暦治水)

■高木水行奉行と内藤十左衛門

TALK&TALK

■長谷川千代子氏が語る宝暦治水

民話の小箱

■入鹿切れ〜天に昇った二頭の馬

大河に浮かぶ歴史のドラマ・犬山市

雄大なる木曾川の流れ、緩やかな稜線を重ねる丘陵地、そびえ建つ犬山城。古より、人が、自然が、歴史と文化を育んだ町、犬山市。かつての城下町は、国際観光都市、学術研究開発の拠点として、未来にむけた新しい胎動を始めています。しかし、環境と人とが調和した暮らしはいつの時代にも…。伝統を守り、自然を慈しむ心は、今も脈々と受け継がれています。



犬山市空撮



太古から人ありき、犬山
愛知県最北端に位置し、西部は濃尾平野、東部は丘陵地、そして北側には木曾川が流れる犬山市。その豊かな表情は、人を暖かく包み込む土壌にもなっています。事実、縄文時代にはすでに小集落が形成されており、弥生時代には稲作も行われていたことが、遺跡から明らかになっています。市内には、妙感寺古墳、青塚古墳、熊野二号墳など、数多くの古墳も残されています。中でも東之宮古墳は四世紀後半に作られたもの。その被葬者であると考えられている瀬波氏は、旧丹羽郡東部である瀬波郡一帯の政治的指導権を握った人物と類推されています。この当時、大和朝廷の力はすでにこの地域にまで及んでおり、瀬波氏もまたその支配下へと組み込まれていたようです。この地の最初の指導者として考えられている大荒田命は、そんな瀬波氏の祖。犬山の楽田にある大縣神社の祭神にもなっています。豊かな土壌に人ありき。人が集えば、それを束ねようとする力が及びます。ちなみに、平安時代の犬山は、藤原氏の荘園として、雑役や年貢が課せられていました。



青塚古墳

様々な火花が散った、鎌倉から戦国の世

やがて時代は下り、鎌倉時代。朝廷と幕府の両勢力が激突した承久の乱は、木曾川沿岸一帯を舞台に繰り広げられました。承久三年（一二二二）五月十二日、後鳥羽上皇が挙兵した倒幕軍に対し、北条義時は遠江以東、四カ国の兵を集めて上洛。六月三日、朝廷側は、その主力を美濃、尾張の県境である尾張川（今の木曾川）に進め、この線で幕府軍の進行を食い止めようとしました。しかし、時すでに遅く、同五日、まだ防陣地を築き上げぬ朝廷軍を幕府軍が攻撃。九瀬渡といわれる木曾川沿い九カ所に分散配置された二万の上皇軍は総崩れとなり、翌日には退却を余儀なくされました。公武両政権間の政治的力関係が逆転し、武家政権の優位が決定づけられることになったこの戦は、まさに歴史の流れを変えた一戦。東海道、東山道、木曾川という三本の経路が交わる便利さがゆえに、戦場選ばれたのもこの地の定めであったと言えます。また、多くの武士が群雄割拠し、その勢力が入り乱れた室町から安土桃山時代にかけて



大縣神社

は、木の下城、羽黒城、楽田城、犬山城…。この地にも多くの城が建立されています。そして天正十二年（一五八四）、織田信長の跡継ぎをめぐって豊臣・徳川両軍がぶつかりあった小牧・長久手の合戦の際に、秀吉の本営となっていたのが楽田城と犬山城。攻防の要である城が数多く築かれたことから、ここが政治上、軍事上、いかに重要な地であったかを伺い知ることができます。



小牧・長久手の合戦絵図

人と物が行き交う城下町

江戸時代になると、そんな犬山にもようやく太平の春が訪れます。特に、元和四年（一六二八）、尾張徳川家の付家老として犬山城主に任命された成瀬隼人正成以降、成瀬家が代々犬山城主を受け継ぐようになってからは、政治も安定。大勢の人々で賑う市も開かれました。入鹿池、木津用水の完成とともに、新田開発が盛んに行われたのもこの頃です。また、街道の整備も着々と進行。名古屋と木曾を結び、中山道と連絡する木曾街道を開設し、各宿駅には荷物輸送を請け負う問屋を設置。街道沿いには一里塚が置かれ、松並木が植えられました。

この時代さらに栄えたのが舟運です。小牧・長久手の合戦で秀吉が大軍を率いて渡ったというエピソードを残す内田の渡しや、伊木へと渡る鵜飼渡し、栗栖街道を勝山において中山道に連絡するための栗栖渡しなど、渡し場は活況を呈し、また木曾川を利用した旅客や貨物の輸送が盛んに行われていました。しかし、その一方で、水による災害も度々



栗栖渡し・石畳

起こり、慶長二年（一六〇八）家康の命を受けた伊奈備前守忠次は、犬山から伊勢湾（現在の弥富付近）までの約五〇kmにわたる木曾川左岸の築堤工事に着手。わずか二年で完成させたこの御囲堤は、洪水対策としてのみならず、豊臣をはじめとする西国の大名に対する一大防御線構想でもありました。

21世紀を目指したまちづくり

日本全土の社会の仕組みを大きく変えた明治維新。明治四年の廃藩置県により、この地域は犬山県に、翌年には愛知県の一部に編入されました。さらに明治二年には、犬山町が成立。枠組みばかりでなく、大正から昭和には、その中身も大きな変貌を遂げていきました。大正元年、名古屋～犬山間に鉄道が開通したのを皮切りに、広見線、小牧線、各務原線が次々に開通。商工業が著しく発展するとともに、昭和二十六年、日本ライン水域や犬山城周辺が県立自然公園に指定され、商業工業、観光の三本柱が、都市を支えるようになりました。昭和二十九年には犬山町、城東村、羽黒村、楽田村、池野村の一町四村が合併し、犬山市が成立。高度経済成長期には、内陸工業団

地への工場誘致をはじめ積極的に工業を振興し、人口も増加していきました。現在では、市面積の東半城を飛騨木曾川国定公園に指定される豊かな自然を活かし、東海自然歩道や国宝犬山城、日本ライン下り、犬山鵜飼、リトルワールド、モンキーゼンターなど、一大レジャーゾーンとして、年間一千万人の観光客が市を訪れます。そして今後は、二世紀への飛躍を目指し、学術研究機能を有する都市として、国際観光モデル地区指定にふさわしい都市として、グローバルなまちづくりを推進しています。

犬山市の伝統産業

赤絵の美しさを誇る犬山焼。その創始は一八世紀末とも言われ、京都、瀬戸など、様々な作風を取り入れて発展してきました。中でも、桜の雲と楓の錦を艶やかに描き出す雲錦手と呼ばれる手法を継承。犬山の風光明媚な風情を表現した器は、犬山焼の代名詞といわれるほどです。



犬山焼

その最盛期となったのは、天保年間。犬山焼は、第七・八代の犬山城主であった成瀬正寿・正住の保護を受け、御用窯としての性格を強めながら製造の基盤を固めていきました。しかし、動乱の幕末期になると資金援助もままならず、斜陽の一途をたどることに。その復興に努力したが、藩の御用瓦師である尾関作十郎。優れた伝統の技を伝えようとしたその意志は、二代目以降にも脈々と受け継がれ、改良と研鑽が重ねられました。こうして、より完成度を増していった犬山焼。今では国内外にも広く認められるまでの成長を遂げています。

水上権を握った大神戸

明治に至るまで、犬山の大安閑として栄えた鵜飼屋港。上流からは材木・薪炭、下流からは肥料・塩・味噌・醤油・呉服、太物が集まるこの港は、優れた船着き場であり、夜ともなれば船人の航行の無事を祈願し、燈台の役目を果たす常夜灯が明々と灯されました。

その鵜飼屋港の王として君臨したのが、神戸、弥生、江戸門です。彼は、文禄五年（一五九六）湊役を免許されて以来、錦織から円上寺港に至る木曾川水上権を掌握。公私の筏を主とし、舟輜の便と貨物の運送を取り扱いました。その権勢は、木曾川取締方、江戸、駿府、名古屋城の御用材納入を仰せつかったことから明らか。成瀬氏の知遇をも得て、その地盤をますます強固なものにしていきました。は薄れることなく、自ら飛騨山において木曾川材木の本拠仕出しを行うなど、生産分野にも事業を拡大しています。

鵜飼屋町の大半を占めるほどの広さを誇る大邸宅を構える川庄屋として、尾張屈指の巨万の富を築き上げた神戸家。その繁栄ぶりは、「筏乗るなら神戸の筏、筏乗らぬは糞神戸」の俗謡に歌われるほどであり、丸の中に十二の文字を描いた神戸屋のマークは明治のはじめまで沿岸を庄しました。

維新後の社会の流動とともに、川庄屋としての神戸屋は没落してしまいましたが、その子孫たちは多彩な分野で活躍。犬山神戸の名和祈新田開発に呼応、十四山村新田開拓の成功によって名を上げた神戸分左衛門、小沢芦庵とも親交の厚かった文人、神戸第七世昌雄をはじめ、歌人、茶人、事業家に至るまで、様々な形で社会に貢献しています。

ふるさとの街・探訪記

広大で肥沃な濃尾平野の大動脈、濃尾用水事業

木曽川は濃尾平野を潤す灌漑用水を中心として、古くから利用されてきました。

江戸時代に入り、世情が安定してくると、

新田開発を目的とした溜池や用水の開削が盛んに行われるようになり、入鹿池・木津用水・羽島用水・宮田用水が開かれました。

しかしそれらは自然の取水。

一夜の洪水で破壊されてしまい、復旧に多くの労力を費やしました。

そんな利水対策が抜本的に行われたのは、昭和三十一年のこと。

三用水の合口取水を可能にした犬山頭首工の完成により、

濃尾平野はより豊かな穀倉地帯として成長を遂げ、

木曽川水系の利水事業は、現在も、着々と進められています。

御囲堤築造と宮田・般若用水の開削

御囲堤の名で知られる濃尾平野の長大な木曽川左岸堤防は、慶長一三（一四年）六〇八（九）にかけて、犬山から伊勢湾（現在の弥富付近）に至るまで、家康の命により伊奈備前守忠次の指揮の下に完成しました。

御囲堤によって、木曽川左岸の一之枝川・二之枝川などの各派川はすべて締切られることとなり、これらの派川にそれまで依存していた灌漑地区は、新たな取水施設が必要になりました。

そのためまず慶長一三年、般若地点（江南市）を流下した二之枝の締切地点に枳（取水施設）を建設し般若用水を、次いで下流では大野地点（現在の一宮市）に枳を建設して大江川（大江用水）に結びました。これらの用水を改修し、新たに開削した奥村用水・新般若用水を統合したものが宮田用水であり、いずれも宮田（現在の江南市）に取水口をもっています。



入鹿池空撮

濃尾平野を潤す木津用水と新木津用水

入鹿池の完成により、小牧を中心に新田の開墾が着々と進み、遠くは、現在の小牧市の北里、春日井市の勝川方面まで水が引かれるようになりました。しかし夏の日照り時などは、灌漑用水の不足が深刻な問題となりました。その上、小牧市付近は、小石のまじった砂地の土地が



昔の木津用水



今の木津用水

多いので水が土に吸収されてしまい、これ以上広い地域に水を送ることが困難となりました。そこで計画されたのが木津用水です。

木津用水の計画は、入鹿池築造を成し遂げた江崎善左衛門をはじめとする五名により進められ、尾張藩に出願して、木曽川の水を木津地先から取水し、東春日井・西春日井・丹羽などの地域に通水させる計画を立てました。

慶安元年（一六四八）には、犬山城下の木津から小口（現在の大口町）に至る四㎞の水路の開削に着工し、同三年（一六五一）に完成、これを大井堀と称しました。次いで寛文四年（一六六四）に小口村で大井堀を分水し、岩崎山の東を経て名古屋北部の味鋺の岩屋堂



昔の宮田東元枳

日本第二の規模を誇る入鹿池

江戸初期御囲堤完成や用水路の開削に並行して、尾張藩では入鹿池の築造に取り組んでいます。

が、将来の交通量増大を予測した犬山市と鵜沼町（現在の各務原市）が当局に陳情した結果、幅六mに変更、橋桁を見ると、幅を六mに広げるためにコンクリートを打ち直した跡を見ることができます。また、頭首工築造後も下流部の木曽川河床低下は進み、度重なる洪水等自然条件の影響により施設の一部が損傷したため、これらを整備するとともに水管理制御施設の近代化を図り、将来にわたって頭首工の機能を安全かつ有効に維持するため、関係者の要請により国営濃尾用水土地改良事業（国営造成土地改良施設整備）を昭和四九年度に着工し、事業費九億六千万円をもって昭和五四年度に完成し現在に至ります。



犬山頭首工空撮



一六三〇年頃まで、尾張東部の平野一帯は草原になった荒地が多く、田畑はほんのわずかなもの。江戸時代に入り、世の安定と人口の増加が進むにつれて、新田開発が急務の課題となってきたのです。

入鹿池が築造された入鹿村は、北に今井の山々、東に奥入鹿の山々が低く連なり、西の方だけがわずかな出口となった盆地でした。この地形に目を付けたのが江崎善左衛門をはじめとする入鹿六人衆と呼ばれた人々。この出口になるところを堰き止めれば、北や東の方から、今井川・小木川・奥入鹿川が流れ込むので、この盆地は大きな溜池になり、その水を利用して台地の開発を計画したのでした。

この計画は、犬山城主成瀬氏から尾張藩主義直に取り継がれ、六人衆を中心に尾張藩の仕事として行われることになりました。

寛永九年（一六三二）、工事は始まりましたが川の流れが強く、幾度も失敗を重ねました。しかし、翌年の二月には、一六三・八m余りの堤防が完成。入鹿村一七haは池の底に沈み、讃岐平野の満濃池と一、二をあらそう大きな溜池が誕生しました。

流況調整河川——木曽川導水事業

流況調整河川とは、複数の川を結び新しい川を建設し、水害を防ぎ、きれいな水を取り戻して、河川環境を整備するとともに、水道などいろいろな用途に使う水を生み出すことを目的とした河川です。

建設省では、流況調整河川として木曽川、新川、庄内川を結ぶ木曽川導水事業を計画しています。

新しい河川（木曽川導水）は、木曽川の犬山市北古勢地先より、古津用水、新木津用水に沿って、新川上流の諸支川を横断し、名古屋市区辻町地先の堀川に至るもので、次の三つの目的を持っています。

- 1 新川流域の水害の軽減（洪水防御）
- 2 新川諸支川及び堀川の流水の正常な機能の維持増進
- 3 水不足の解消（都市用水の新規開発と導水）



愛知県丹羽郡扶桑町付近完成予想図

美しき木曾の流れと、咲き競う桜花。 犬山は、今、爛漫の春。

水ぬるみ、桜並木に満開の花を咲かせる春。麗らかな陽差しに誘われて、川岸の土手に両手を広げて寝そべれば、柔らかな風がすりぬけていく。くるりくるりと葉をひるがえす瑠璃色の花、ひらりひらりと風に舞う桜花。しばし浮世を忘れる春の休日。



桜並木と木曾川

爛漫の春を追いかけて

空を映す川面は青緑にまどろんで、春風が撒き散らした淡桃色の花びらを、おほじきをするように浮かべている。山肌を染め尽くす桜は、青い空にまで届けとばかりに、咲き競う。さまざまに咲き、さまざまに散る桜の花は、まるで人の世の映し鏡。だからこそ、人はその人生を桜の花びらに重ねるのでしょ

うか。風に乘って限りなく舞い散る桜花。その花びらをそっと抱きとめる木曾の流れ。山と川と古城の街・犬山は、今、爛漫の春。妖しいほどに美しい春が、裾音をたてながら、走り抜けてゆく。



名古屋駅から名鉄電車に乗っておよそ三分。林立するビル群を抜け、ひしめく家並みを通り過ぎたところ、車窓の風景は穏やかな田園風景へ。緑のしずくをたつぷりと含んだ山並み。そのたおやかな光景は、「ひねもすのたりのたりかな」。そんな鉄路の旅をじつくりと味わう間もなく、電車は犬山遊園駅へ。プラットホームに降り立つと、柔らかな緑の香りが、出迎えてくれました。

妙心寺派の古本山・青龍山瑞泉寺



瑞泉寺

発車を告げるアナウンス、列車を知らせる踏切の音……。そんなノイズに後押しされるように踏切を渡ると、急な石段の参道が見えてきました。この参道は瑞泉寺へ続く道。参道脇に生い茂る竹林は新緑に染まり、竹林を渡る風は今なお冷たく、吐く息さえ白い春の一日。急な石段を登りつめると高き四m余りの山門が見えてきました。この山門は黒塗りの薬医門で、犬山城の内田御門をここに移築したもの。木曾を下り、時を越えて、どつしりと大地に根を張る山門は、禅の道・無常を今日に伝えているのでしょうか。言わずもがなの風格は、禅の世界へのプロローグ。山門をくぐり、石段をさらに登りつめると、臨済宗妙心寺派の古刹・瑞泉寺がその荘厳な姿を現します。

瑞泉寺は、室町初期の応永年間に日峰宗舜（妙心寺再興）が創建したお寺。その昔、現地へ訪れた禅師がこの山に水が出ないことを知り、弟子蜂屋玄瑞に命じて岩頭をうたせたところ、清泉が湧き出たとか。禅師は弟子の名をとって瑞泉寺と名づけ、泉から立ち昇る水気が、龍が昇天するさまに似ていることから、山号を「青龍」と決めたと伝えられています。

龍が昇るがごとく、泉が湧き出ることく。禅師・開山の思想は、今なお深くこの地に刻まれているのでしょう。鐘楼に刻まれた左甚五郎の彫刻三猿、細川家秘蔵の「血達磨図」など、時空をくぐり抜けた寺宝の数々は、歴史の綾を、問わず語りにつぶやきかけてくるようです。

天下の名城・白帝城
瑞泉寺の急な石段を降り、木曾川に沿ってのんびり歩いていると、天下の名城・犬山城が見えてきます。



名勝木曾川

川面に燃える春爛漫

「名勝木曾川」は日本ライン（地理学者志賀重昂の命名）で知られる岐阜県可児市の大湊から、犬山木津へいたる木曾川溪谷の総称で、昭和六年、国の名勝に指定されています。遠く木祖村・鉢盛山に源を発する木曾川。その清き流れは、時には水やすりとなって、岩肌におブジェを刻み込む。蛇のように、竜のごとく、その姿を変えながら、あふれるほどの恵みを与え、時には命まで奪い取ってゆく……。

その岸辺にたたずめば、咲き競う花々を抱きとめるように、美しい春を川面に映し出しています。

ひとひら、ひとひら、風に揺れながら、舞い降りる桜花。その花びらをひとひら手にとれば、悠久を越えて繰り返される、生命の調べが聞こえてくるようです。

気ままにJOURNEY



石上げ祭

天下の奇祭・石上げ祭を 伝える尾張富士浅間神社

犬山市の南東にある尾張富士は尾張三山の筆頭にあげられるほど、由緒ある山。海拔二七七m、その形が駿河の富士に似ていることから、尾張富士と呼ばれ親しまれています。

その山裾には尾張富士浅間神社がしっかりととした趣をたたえて佇んでいます。

このお社は、天平元年（七二九）に建立され、祭神は木花

開耶姫命。不思議な伝説が伝えられています。

その昔、ある信者が尾張富士へ登り、祈願したときのことです。その夢枕に、祭神・木花開耶姫命があらわれ、隣の本富山の方がやや高く、尾張富士が低いことを大いに嘆かれました。翌朝信者は、神慮にこたえようと、木曾川の清浄な大石を拾い上げ、山頂に積み上げました。

これを伝え聞いた人々は、こぞつて大石を奉納。その風習は石上げ祭りとして、毎年八月第一日曜日に、開催されています。

登山口から山頂まで連なる大篝火の列。天にも届けとばかりに火の粉を噴きあげる篝火は、紅く、熱く……。炎が燃え盛る坂道を氏子たちが大縄に篝火を結びつけ、振り回しながら、駆け下ります。

夜空を焦がす火と焰の祭典。その壮観さは一幅の時代絵巻と言えましょう。

犬・山・市・の・歳・時・記

●犬山まつり（針綱神社の祭礼）

一四月第一土・日曜日
針綱神社の祭礼は寛文十三年（1635）八月から始まり、慶安三年（1650）二代城主成瀬正虎の推奨により、次第に山車や練物が揃うようになりました。

土曜日の試案祭には、三層の山車が一三台繰り出し、笛、太鼓に合わせ、カラクリ人形を披露します。夜になれば、各山車に三五〇個もの提灯が灯され、満開の桜並木を練り歩く様は豪華絢爛、まるで錦絵を見るようです。山車は愛知県有形民俗文化財に指定されています。



犬山祭からくり人形

●鵜飼ひらき

一六月一日

犬山鵜飼は、今からおよそ三百有余年前、三代城主成瀬正親公により、幕府の御料鵜飼として始められました。夜空に浮かび上がる犬山城を背景に、木曾川を紅に染めて狩り下る四隻の鵜飼船。古式ゆかしい腰蓑装束をまとい、一二羽の鵜をあやつる巧みな鵜匠たちの手綱さばきは、幻想的な夏の夜の古典絵巻さながらに、訪れる人々の心を魅了してやみません。



鵜飼



犬山市への交通

●公共交通機関利用●

名鉄／名古屋・岐阜方面から
■名鉄電車犬山線で30分
名古屋駅→→→→→犬山遊園
■名鉄電車各務原線特急で30分
岐阜駅→→→→→犬山遊園

●マイカー利用● 約20分

小牧I.C.→→→→国道41号線を北へ11km→→→→犬山

犬山城は、姫路城、彦根城、松本城と並ぶ国宝の城。天文六年（一五三七）織田与治郎信康が、かつての居城木の下城をこの地に移築し、造営したと伝えられています。犬山城の別名は「白帝城」。江戸時代の儒学者荻生徂來が、李白の詩にちなんで命名したと伝えられています。朝に辞す白帝彩雲の間
千里の江陵一日にして還る
兩岸の猿声啼きやまず
輕舟すでに過ぐ万重の山



犬山城天守閣

時に唐の玄宗の時代のこと、安祿山の反乱の咎で流罪となった李白が恩赦にあずかり、その帰途、この詩を詠んだという。

長江の上流・四川省の山地に聳える白帝城。春の桜、夏の緑、秋の楓、冬の雪、四季折々の風情の中で、一際その美しさを香らせるその城は、時代のエポック。凛とした気高い表情は、白帝城に通ずるものがあつたのでしょうか。

天下の名城・犬山城の天守閣は、日本最古のもの。直角に近い急な階段を幾段も昇りつめると、そこは展望台。東に木曾御岳、北東に恵那山、南に小牧山、そして伸びやかに広がる濃尾平野……。その眺望は一八〇度の大パノラマです。時の城主・織田信康もこの天守から戦火を見据え、采配をうつたのでしょう。

眼下を見下ろせば、そこは人、人、人。まるで小人のような観光客を眺めるうちに、なんだか小人の国のガリバーみたいに思えてくるから、不思議なものです。

高木水行奉行と内藤十左衛門



水行奉行高木家伝来土俵空襦 (岐阜県博物館蔵)

水行奉行高木家
屋敷見取図
(高木貞勝氏蔵)

宝暦治水は近世治水史の中でも、画期的な治水事業。その工事区域は木曾三川下流域のほぼ全域に及び、八〇余名にもぼる犠牲者は、その難事業のほどを物語っています。高木三家は、その難工事の実質的な工事監督者。人材の確保や工事進行に具体的に関わったと伝えられています。今回は水行奉行の高木家の特集。その家臣内藤十左衛門の切腹の顛末を追跡します。



水行奉行高木家伝来甲冑 (高木茂正氏蔵)

高木水行奉行の役割

木曾三川の近世治水史をみると、特異な事実として、旗本・高木家が河川管理と治水工事に深く関与した事実をあげておかなければなりません。

高木家は旗本に属してはいましたが、大名なみに参勤交代を求められるほどの格式を与えられ、領地は美濃石津郡の時・多良両郷（現在の養老郡上石津町）。西・東・北の三家からなり、西高木家二三〇四石、東・北両高木家が各一〇〇一石で、参勤交代は三家が三年に一度行っていました。

高木家が川通掛・水行奉行に任じられたのは宝永二年（一七〇五）。高木三家は年番で交替して春秋兩度、美濃国内諸河川を巡視し、河川の治水状況を視察して、河流の障害物の除去、堤防の補強、水防施設の改善などを、指示・勧告する任務を果たすようになります。

高木家川通掛の就任の理由については諸説がありますが、同家が幕臣であり、また徳川幕府成立以前からの在地領主であったことが第一に掲げられるでしょう。即ち、地域社会に根づいた治水問題の解決法、またその解決にまで長期に渡る努力と方策を保障し、さ

うことができます。

普請場での十左衛門



「起請文」
(名古屋大学附属図書館所蔵・高木家文書)

水行奉行高木新兵衛家来内藤十左衛門手記「川原御用日記」
(名古屋大学附属図書館所蔵・高木家文書)

一人、高木家家臣内藤十左衛門義厚が自らしています。切腹者に加え、病死者などの犠牲者が八〇名を超える多人数であったことも、他の普請と比べいかに困難を伴う工事であったかを物語っています。

さて宝暦治水を着工するに当たって、幕府は薩摩藩に御手伝普請を命ずるとともに、勘定奉行一色周防守政■を工事責任者に任命。宝暦三年（一七五三）には、美濃国在住の水行奉行高木家へも御用を命ずる旨の書付けを送っています。

多良西高木家の当主新兵衛が、濃州勢州・尾州川々御普請があり、自分達が普請御用を命ぜられているのを知ったのは、宝暦四年（一七五四）一月八日、工事開始の二月二十七日までわずか四六日前のことでした。御用を命ぜられた高木家が当面急いで解決しなければならなかった課題は、普請に当たって実際に現場を監督することができる人材。特に今回のような大規模な工事では、高木家がこれまでかかえてきた役人だけでは不足であり、しかも有能な人材を短期間に見つけなければなりませんでした。

こうした状況の中で雇い入れたのが、内藤十左衛門義厚でした。

内藤十左衛門・その人物像

内藤十左衛門義厚の身分は未だに定かではありません。ただ内藤という姓を持ち、使用する印章も農民のそれよりは大きく、印文も縦に「義厚」と彫られているところから武士だと推察できますが、少なくとも宝暦治水のために雇われたことからして、相当の治水技術を持ち、これまでも洪水への対処、治水工事での指示等を行ったことのある、いわば治水のベテランだと考えられます。そして彼のような人物が、宝暦治水を支えてきたのです。

十左衛門は高木家に仕えるに当たって、起請文を記しています。その起請文によっても、彼の普請に対する決意を窺

十左衛門が派遣されたのは二之手。区域は尾州梶島村から勢州田代輪中に至るまで。二月七日には御鞆始めがなされ、工事は正式に始まったのでした。御鞆始め以後、十左衛門は五明村に逗留して、五明輪中沿岸の工事に当たりました。その内容は木曾川通りでは、堤切所の腹付、上置で工事延長約七二m、海老川通りも同様工事延長約六一m。彼は堤方役人野村弁右衛門とともに工区の実質的な工事責任者の役割を負っていました。その二人のもとへ、「いづれか一人、和泉新田へ出向せよ」との書状が届きました。結局十左衛門が出立し、和泉新田へ。この地での普請は、木曾川通りの堤腹付約五一八m、堤上置二四六m、海面の堤腹付約四五三mなど。彼はここに四月二日まで逗留し工事に当たりますが、海面の腹付や堤上置など難工事を含んでいたため、指示や監督にも苦勞があったと思われる。



「内藤十左衛門一件留メ覚」
(名古屋大学附属図書館所蔵・高木家文書)

宝暦治水に全力を挙げて取り組んでいた十左衛門が、何故切腹という事態に追い込まれたのか。工事の戦列から離れなければならないのでした。

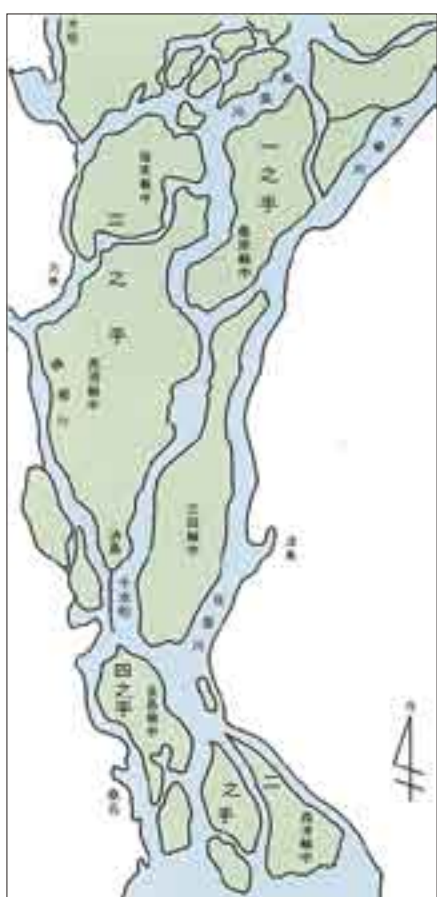
切腹後、青木次郎九郎の質問書に答えた口上書には、和泉新田での普請に係る顛末が記されており、「庄屋の与次兵衛が私の思うように動かなかつたため、工事にうまくいかなかった所ができた。これを私の手ばかりだとして、御徒目付から高木家に沙汰がなされたら、私の身の置き所がなくなるから…」という内容のものでした。

海面の腹付や堤上置など難工事に際し、様々な困難に直面した十左衛門。その一つが与次兵衛との折り合いの悪さだったのだでしょう。しかし、彼が従事していた二之手の普請

切腹の顛末

宝暦治水に全力を挙げて取り組んでいた十左衛門が、何故切腹という事態に追い込まれたのか。工事の戦列から離れなければならないのでした。

普請を終えた四月三日に、十左衛門は五明村へ帰っています。悲劇が起こったのは、その二〇日ばかり過ぎた宝暦四年四月二日夜七ツ頃（二三日早朝、宿所としていた五明村百姓彦八方で十左衛門は切腹。しかし絶命するには至らなかったため医師に手当てされる。一方、普請場掛青木の家来から尋問を受け、五ツ時頃ついに死亡。享年三九歳でした。



宝暦治水跡と工区分

- 参考文獻
- 『宝暦治水と薩摩藩士』伊藤信 鶴書房 一九五四年
 - 『木曾三川とその流域と河川技術』建設省中部地方建設局 一九八八年
 - 『宝暦治水と内藤十左衛門』笹本正治『中部図書館学会誌』二二巻一三合併号
 - 『内藤十左衛門切腹一件の処理における公的文書の性格』伊藤孝幸
 - 名古屋大学古川総合資料館報告

宝暦治水のあらまし

シリーズ

- 宝暦治水はわが国治水史上最大の難事業。宝暦三年（一七五三）十二月二十五日、幕府は薩摩藩に御手伝普請を命じ、総奉行公平田朝貞をはじめ九四七名の藩士により、翌年二月二十七日、工事に着工。工事区域は木曾三川下流域ほぼ全域に及ぶもの。修繕工事、復旧工事と中心課題の木曾三川分流のため、逆川洗堰締切工事、大樽川洗堰工事、油島新田締切工事が実施された。同五年五月二日に工事は竣工。木曾三川の完全分流には至らなかったが、明治以降の近代治水の先駆と評価されている。
- ◎第一編 VOL. 8 宝暦治水の概念
- ◎第二編 VOL. 9 工事の歴史的評価
- ◎第三編 VOL. 10 宝暦治水の功労者たち
- ◎第四編 VOL. 11 今に残される工事跡

小冊子『薩摩義士之偉業』と父・長谷川鑑三の思い出
——長谷川千代子

薩摩義士の顕彰活動に尽力した故長谷川鑑三氏。

治水神社の造営に奔走し、「薩摩義士之偉業」を執筆した鑑三氏の志は、長谷川千代子氏にしっかりと受け継がれている。宝暦治水を顕彰する人々の熱き思いは、今も途絶えることなく輪中地帯に根づいている。

そこで今回は長谷川鑑三氏の生前の活動を、ご息女千代子氏に語って頂きました。



長谷川千代子氏・自宅にて

長谷川千代子氏・プロフィール

カールススワート岐阜県一八団育成委員長
平田町・昭和町福祉推進委員
大正二年 朝鮮金羅南道に生まれる。
海津高等女学校卒業後
25年間の小学校教員生活を経て現職へ。
薩摩義士の顕彰活動に尽力した父長谷川
鑑三氏の志を受け継ぎ「薩摩義士の偉
業を後継」
地域に密着した福祉活動「薩摩義士の顕
彰活動」を積極的に展開している。

私どもの水郷海津郡は、岐阜県の最南端に位置し、木曽、長良、揖斐の三川が交わる輪中地帯です。木曽三川公園の展望タワーから見下ろせば、水と緑が織りなす眺望は素晴らしい、春ともなればチューリップの花園、船頭公園の桜花爛漫など、視野は遠く山々に、そして三川悠々と流れ広がる様は、全く夢心地です。

国営開木曾三川公園完備の今、遠く思いを走らせば、宝暦治水の薩摩義士の功績、苦衷を思い出します。

幕府の命とはいえ、全く知らぬ土地で刀を捨て、土工姿での日々の苦難の数々……

身はたとへ 武蔵の野辺に 朽ちるとも
とどめおかまし 大和魂

吉田松陰先生の辞世にも似た心境だったと思います。

大正の初期は、まだ治水神社もなく「この

した。

その時の一寸エピソードがあります。「いやこれは女子がゆつくりと静かに、すつた方が、墨のりがよく書きやすい」といわれた由。またその素敵な原書は、父がとても欲しかったが、菱田氏の要望で差し上げてしまい、海津町東江の菱田家にあることと思います。

ところが神社が完成しても参詣社はあまりありませんでした。橋も少なく、道路も整備されていなかった昭和初期のこと。そんな貧しい交通事情が参詣者の足を止めてしまったのでしょうか。

その頃伊勢大橋が開通した時、良長・揖斐背割堤にある治水神社へ通ずる大橋の開口を設けられたしと、父は三重県庁や愛知県庁へ必死の嘆願運動をしています。その甲斐あってか、治水神社への開口は漸く実現し、傍らに黒々と、「この道は、ハイキングコースに最適で、その奥には治水神社があり、是非参詣されたい」という看板を立てました。

その辺り一帯は、降雨時は水がわたり難渋したものでしたが、今ではすっかり改修されて、その心配は全くなくなりました。

そんな堤防の改修工事により、父の書いた看板も、いつの間にかなくなってしまうましたが、そこを通る度に、父の面影を懐かしく思い出しております。



揚げ仏壇

また平田町では、当時墨俣の輪中堤を平地にして工場及び団地を誘致し、町の活性化を図るための集会在開されました。大衆は皆と云うていい程、輪中堤は無用の長物だと、その取り壊しを主張しました。

しかし父は「先人の残した生活の知恵である輪中堤は、絶対壊してはいかん」と強く反論。その叫びに抗した大勢の人に、袋叩きに



薩摩義士之碑

偉人をこのままにしていゐるのか。赤穂義士にもまさるこの薩摩義士の苦衷を、皆はどう

「思っているのか」との独言を父からよく聞いたものです。

父は当時郡役所（海津郡海津町高須）に勤め、さらに高須輪中水害予防組合の主事として務めていました。日夜輪中堤の視察、諸式庫（護倉）の点検を致し、近くの脇野排水機は、いつも父の許可をうけ運転していたのを記憶しています。

また、ふと南濃町田鶴の鷲野氏を訪問した際、父をよく知ってみえ、「危ないところをよく助けて貰いました。」と話され、懐かしく思ったことでした。

若い頃から洪水と闘い、水防活動を生涯の仕事と奔走した父は、堤防の欠損箇所などをよく心得ていたのでしょう。大雨などにより一旦水嵩が増えれば、どこに杭を打ち、土嚢

されそうになったこともありました。

昭和五年九月十二日に安八町森部輪中の長良川が決壊した時は、平田町も大変でした。上流が切れては駄目だと水かたづけで大わらわになり、早速かけつけてくださった親戚知人で、先ず仏壇を揚げました。かねて揚げ仏壇とは聞いていましたが、こうして上下に二人づつ簡単に上がるのには、まさに先人の知恵のなせる技。その巧妙な出来栄えに呆然として、思わずお先祖様に合掌しました。

今、私たちはこの輪中の中に住み、薩摩藩家老平田鞆負公の名前を町名に頂き、その崇



高な精神を、永久に語り継いでいきたいと思っています。

この薩摩治水工事の総奉行、私どもの大恩人平田鞆負公の辞世の句は、私どもの心に残り、次の世代に感謝と努力の心をいつまでも受け継いでいってほしいものです。



生前の父と

を積み上げるのか……。その的確な指示により、実りを迎えた水田も、水害から免れることができた。鷺野氏は懐かしげに語ってくれました。

自転車を駆って海津郡の北端から最南端まで走り回った父。まだゴムのタイヤもない時代に、よくも遠くまで来たものだ、今さらながら驚かされる次第です。

垣市の図書館通いをしていたのを見て、えらいなあと思っていたことでした。

その父も昭和五二年（一九七七）に逝き、治水百周年を迎えた昭和六二年（一九八七）の或る日、ふと二冊の父の遺稿を見つけました。それは薩摩義士の偉業を記したものでした。

生前よりその義士の並々ならぬ恩恵を、もつと多くの人達に伝えたいという父の思いに胸を打たれて、復刻を思い立ちました。

小冊子『薩摩義士の偉業』は大正九年（一九二〇）が初版で、四年、昭和二年、十年、十二年、一四年、一七年、二五年、六二年と再版し、昭和六三年に十版目を数えました。現在この郷土を護り、苦難を重ねて頂いた薩

BOOK LAND

薩摩義士之偉業

発行所 岐阜県海津郡
治水神社建設事務所
発行兼編集者
長谷川鑑三
長谷川千代子

莫大な借財と多くの犠牲者によって成し遂げられた宝暦治水は、時代の風雪によって忘れられようとした時代があった。近代化が進む明治・大正時代。薩摩義士の偉業は、時代という大河に流されようとしていたのである。平田町今尾に生まれた長谷川鑑三氏は、故郷の大恩人である宝暦治水や薩摩義士の足取りを顕彰。大正という不毛の時代を背景に、薩摩義士の偉業を記した名著である。

民話の小箱

入鹿切れ〜天に昇った二頭の馬

犬山市・池野

春には美しい桜並木を映し出し、夏には水面がキラキラと輝く入鹿池。

その入鹿池が造られたのは寛永一〇年（一六三三）のこと。

人々は、堤防が切れないことを祈って、

彫刻の名人・左甚五郎に池の主を作ってもらうことを決めました。

甚五郎が掘りあげたのは、見事な二頭の馬。

それは人々が見守る中、ゆつくりと池に沈んでいきました。

しかし、江戸時代から明治時代が変わろうとした年のこと。

四月下旬から続く長雨が降り止まず、

池の水は増える一方だったのです。

「おい。大丈夫だろうか」

「こう、雨が降り続いては、

堤防の土もゆるんでしまうなあ」

人々は口々に、

入鹿池を心配していました。

そしてあるとき、池の様子を見ると、

なんと、馬が水を飲んでいてはありませんか。

しかも、馬がひとのみすることにグンと、

水面は二メートル近くも減っていきます。

「ああ、あれはきっと、あの時入れた池の主のおかげじゃな」

「本当に、ありがたい、ありがたい」

しかし、その後も雨は容赦なく降り続き、ついにある日のこと。

突然、ゴロゴロ、シューツという音が鳴り響いたかと思うと、

大きなおなかをした二頭の馬が天高く昇っていくではありませんか。

入鹿池の堤が切れてしまったのは、その瞬間のことでした。

この災害は、とてつもなく大きなものとなり、

池の水は名古屋にまで流れていったということです。



木曽川文庫利用案内



《開館時間》 午前9時～午後4時30分

《休館日》 毎週月曜日・祝祭日・年末年始

《入館料》 無料

《交通機関》 国道1号線尾張大橋から車で約10分
名神羽島ICから車で約30分
東名阪長島ICから車で約10分

《お問い合わせ》

船頭平閘門管理所・

木曽川文庫

〒496 愛知県海部郡

立田村福原

TEL(0567)24-6233



編集後記

いよいよ春もたけなわ、行楽シーズンの幕開けです。皆様にはいかがお過ごしでしょうか。

四月二五日には治水神社春季例祭が開催され、舟神輿三隻と、詩吟、婦人会の踊りなどが奉納されます。今年は宝暦治水から数えて二四〇年目にあたります。この機会に薩摩義士の偉業を偲び、足跡を辿ってみるのも素敵なことですね。

Vol.10編集にあたっては、犬山市役所、名古屋大学付属図書館、東海農政局犬山管理事務所の皆様には、大変お世話になりました。ありがとうございます。

次回は平田町を特集。宝暦治水のコーナーでは今に残る工事跡をご紹介します。ご期待ください。

表紙写真

左上：犬山城と桜

左下左：日本ライン下り

左下右：鵜飼

右上：からくり人形

『KISSO』Vol.10 平成6年3月発行

発行：建設省中部地方建設局木曽川下流工事事務所 〒511三重県桑名市播磨81

制作：財団法人河川環境管理財団 〒450愛知県名古屋市中村区名駅四丁目3番10号(東海ビル)

TEL(0594)24-5715

TEL(052)565-1976